

ワシントンの桜 余聞

山口 昭

興津にいたことのある人なら誰でもアメリカ合衆国の首都ワシントンD.C.のポトマック河畔の桜が、興津で接ぎ木育成されたものであることは知っているでしょう。平成4年には、興津支場の構内に「ワシントンの桜誕生の地」碑が建てられ、興津開場90周年記念式典に合わせて、除幕式がおこなわれました。

ワシントンに桜の樹がほしいといったのは、当時のアメリカ大統領タフト夫人であること、尾崎行雄東京市長が日米親善のために寄贈したことは知られていますが、誰が中をとりもったのか、苗木代や輸送費用は誰が負担したのかなどについては、案外知られていません。そこで、今回は、その辺の事情を書いてみます。

エリザ・R・シドモア女史のこと

シドモアさんは、1856年生まれ、アメリカの有名な写真雑誌「National Geographic」の紀行作家で、世界中を取材して廻りましたが、日本にも3回、3年間滞在し、日本中を旅して、こよなく日本特に桜を愛しておりました。欧米の読者に明治中頃の日本を紹介した「Jinrikisha Days in Japan」という著書もあります（「日本・人力車旅情」恩地光夫 訳 昭和61年刊、有隣堂）。彼女はワシントン当局に桜を取り入れるよう何度も進言しましたが、聞きいれてもらえませんでした。そのとき旧知のタフト夫人が大統領夫人となったことを知り、頼みこんだところ受けいれてもらったのでした。タフト夫人自身もかって日本を訪問した折、桜の美しさに打たれ、ファーストレディーとなった最初の仕事として、是非桜をアメリカに導入しようと思ったのです。

エドモアさんは1925年、アメリカを去り、スイスに移り住みましたが、1928年72歳で死去しました。在日米領事であった兄とともに横浜の外人墓地の中、ワシントンから里帰りした桜の樹の下で眠っています。

高峰譲吉 博士と近藤廉平 社長のこと

高峰譲吉 博士は「アドレナリン」の発見者であり、「タカジアスターゼ」の商品化に成功した科学者として有名です。三共株式会社の創始者でもあります。夫人はアメリカ人で、主にニューヨークで仕事をしていました。かねてから、桜を日本から入れたいと思っていましたが、たまたまワシントンに導入される話を聞き、これが実現するよう、アメリカ領事館の水野幸吉総領事と相談し、外務大臣小村寿太郎に手紙を書き、東京市長尾崎行雄から日米親善のためワシントン市に贈呈することが決まったのです。このとき、高峰譲吉博士は、苗木代および輸送運賃を持つことを申し出ました。

この話を聞いた日本郵船株式会社の近藤廉平社長は桜の苗木を無料で運ぶことを申し出ました。ご承知のように、1回目の苗木はアメリカに到着後、害虫がついていることが理由で、すべて焼却されました。この失敗を繰り返さないため、当時の農事試験場古在由直場長の名で興津の恩田鉄弥園芸部長に苗木作成の命が下る

ことになるのですが（後述）この2回目の輸送も、日本郵船の好意で無料でなされたのです。

田中彰一博士の推薦で熊谷八十三翁に感謝状が

桜苗木の作成の依頼を受けた恩田部長は、これを熊谷八十三技師に命じました。品種の選定は東大教授三好 學博士にはかり、素性のたしかな荒川堤の桜から穂木を採り、台木の養成は兵庫県川辺郡稲野村之内新田中野村字東野（現在伊丹市）に依頼しました。当時、農薬もない頃、十数品種、六千数百本の健全な苗木を作成することは至難のわざ、非常に責任の重い仕事でした。2回目に届いた苗木を検査したアメリカ検疫陣は、その見事さに驚嘆したと伝えられています。

この労苦に報いてもらおうと、元興津支場長田中彰一博士は、1962年、当時のエドウィン・オー・ライシャワー駐日特命全権大使に当てて、直接手紙を書きました。その結果、幸運にも翌年、尾崎記念館で開催された「ワシントンサクラ植樹五十年記念式典」の日にワシントン特別市理事会議長ワルター・エヌ・トプリーナの名で感謝状が熊谷八十三翁に贈られました。この感謝状には、ライシャワーさんの署名がついています。（田中彰一著「随筆八十路越えて」北泉社、1984）。

（註 1）この小文を書くに当たって、興津桜会会員安東和彦氏、元三共株式会社 石田三男取締役から示唆・資料をいただきました。厚くお礼申し上げます。

（註 2）私も、1979年から4年余、興津に勤務しましたので、ワシントンのサクラのことは関心を持って調べていますが、アメリカのホームページ「The Story of Cherry trees in Washington D.C.」にも興津の果たした役割についての記述が非常に少ないことを残念に思っています。もっとPRする必要があるように思います。